

日本におけるクラシックコンサートに参集した
聴衆の満足度水準に関する研究

好 満 あ き 子

Study on Satisfaction of Audience Who Gathered in a Classic Concert in Japan

Akiko Yoshimitsu

The influence to give satisfaction on performance contents of the classic concert by difference in music experience was investigated at the piano concert in Hiroshima. It was cleared that the hearing experience of the status-like concert was not accumulated as listening to artistic music by findings. There is not an opportunity to hear the concert of the contents along the music experience level of the person, and the causes include what cannot train ability to listen to music with concert experience. It is important to grope for the offer method of the concert so that a general person knows it well whether you intend for the contents of the concert and what kind of classical music as one of the solutions.

キーワード

聴衆の満足度 satisfaction of the audience, コンサート内容 contents of classic concert
鑑賞経験 music experience, 音楽鑑賞能力 ability to listen to music
クラシックコンサート classic concert

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 音楽学科 Department of Music

1. はじめに

日本は、明治維新後に近代化をはかるため、西洋文化を一気に取り入れた。その一環として、クラシック音楽も取り入れられ、学校での音楽教育から音楽大学などの専門教育までクラシック音楽を土台としてきた。しかし、それらは演奏する技術教育に重きを置かれ、「聴く」こと、いわゆる鑑賞の方はあまり重要視されず、音楽への深い洞察力などを養うことに対して希薄であったように思える。そのことが、クラシック音楽は退屈なもの、というイメージを与えた可能性がある。

一方で、あらゆる場面で西洋から来た音楽が使われ、クラシック音楽の演奏家も増えて、クラシック音楽は日本の社会に広く根付いている

かの印象も受ける。しかし、普遍的な芸術文化としての価値は認識されていない可能性がある。クラシック音楽が次々と輸入され、表面上だけの繁栄を見せている。そして、そのような現状を打開しようと、現在、日本では様々なスタイルのコンサートが開催されている。例えば、トーク付きコンサートや作品解説なども行うレクチャーコンサートは最近特に増えてきており、さらに音楽祭では、短い演奏時間のコンサートを多数開催して、気楽に立ち寄って聴くことのできるものなど、多岐にわたっている。このように、企画する側が様々な新しい発想でクラシック音楽の裾野を広げようとしている。

前回のイタリアでの調査では、トークコンサートや名曲コンサートなど、今日本で流行しつつあるスタイルのコンサートに対して、あま

り賛同が得られない結果が出た¹⁾。今回、日本で調査を行ったが、西洋と社会的、文化的な土台が異なる日本では、コンサート内容に対する満足度はイタリアでの調査結果とは異なるものとなった。人は、それまでの経験度合いによって、満足度が変わってくると推測するが、どのような音楽経歴の人たちが、何を重要視しているのかを分析調査してみた。

2. 調査方法

前章で示したように、クラシックコンサート参集者の満足度を計るため、参集者をコンサート経験度や楽器実演歴、音楽的環境度によって分類化し、その上でどのような内容のコンサートに満足度を高めるかを調査した。アンケート調査の概要は以下に示す通りである。

調査対象：ピアノリサイタル参集者

調査時期：2011年1月

調査場所：広島市、市内の音楽ホール

調査方法は、リサイタル開始直前に直接配布し、リサイタル終了後回収。350枚配布し、187枚回収、回収率は53.4%であった。調査の内容は、以下のとおりである。

- ・音楽鑑賞頻度
- ・楽器実演歴
- ・音楽的環境度
- ・クラシックコンサートの雰囲気
- ・コンサートでの内容に関する満足度

3. 調査対象者の概要

(1) 調査対象者の属性

調査対象者の属性を表1に示す。60代以上がほぼ半数近く、次いで50代が17.0%と、若い世代へ行くにつれて減少する。日本では高年齢層が多数を占めた。しかし、中間年齢層である40代と50代を合わせると29.6%になり、働き盛りのこの層が3割弱を占めたため、予測していたより、この世代は多かった。若年層は最も少なかったが、クラシックコンサートに参加するための環境条件が悪い事が原因でないかと思われる。本家本元のヨーロッパでも、最近のクラシックコンサートの聴衆は高齢化し、若年層が減少している傾向を耳にする²⁾。働き盛りの若者は、余暇の時間が十分に取れなく、本人の選好以前に、芸術文化活動を行うことは時間的にほとんど不可能なのである³⁾。

表1 有効回答者の属性構成 (単位：%)

年 齢	10代	5.5
	20代	6.0
	30代	11.5
	40代	12.6
	50代	17.0
	60代以上	47.3

(2) 調査対象者の音楽経験度

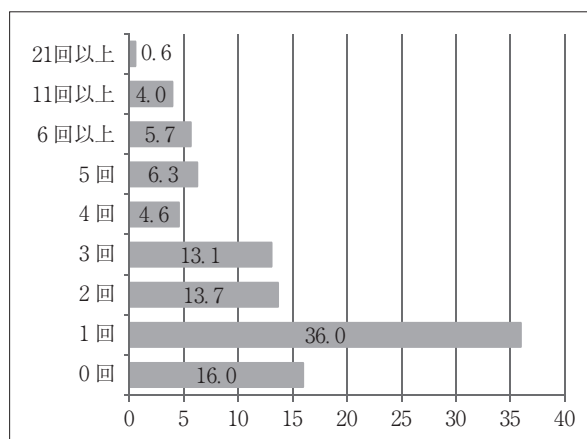
調査対象者を日常的な音楽経験度により分類をするため、音楽鑑賞頻度、楽器実演歴、音楽的環境度を調査した。

①音楽鑑賞頻度

鑑賞頻度を調べるために、「年間のコンサート回数」、また「何年前から通っているか」、さらに自宅での鑑賞頻度として、「CD等で週に何時間クラシック音楽を鑑賞しているか」の3つの設問で調査した。

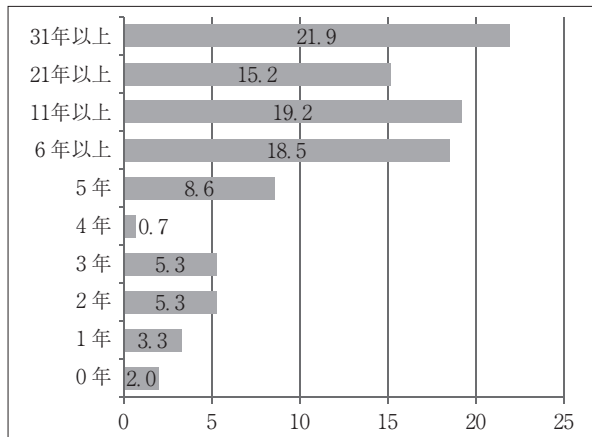
図1にコンサートへ行く頻度を示す。年に1回と答えた人が一番多く36%であった。年に2～4回の人たちを合わせると、31.4%の人たちが年に数回鑑賞している。全体を見ると、年1回以上鑑賞している人が84.0%とほとんどで、定期的にコンサートへ通う常連が多いと言えるだろう。

図1 コン서트へ行く年間頻度 (単位：%)



鑑賞期間に関しては、コンサートへ行くようになったのは、31年以上前から最も多く21.9%であった。図2を見ると、5年以上長い期間来ている人が、合わせて83.4%と8割を超えている。40代、50代の中間年齢層も5年以上前から来ている人が多く、全体的に鑑賞期間の長い人たちだと言える。

図2 コンサート鑑賞期間 (単位: %)



続いて自宅での鑑賞頻度だが、週に1時間が最も多く38.7%。全体から見ると、週に2時間以下が72.3%と7割を超えており、自宅での鑑賞時間は短時間の人が多かった。全く聴かない人は19.3%で、それ以外の人は週に1時間以上は聴いているということから、8割の人は、週に一度はクラシック音楽を自宅で聴いており、日常的に鑑賞活動を行っている層であると言えるだろう。

②楽器実演歴

次に楽器実演歴を調査した結果を表2に示す。全く習っていない人が一番多く45.5%と半数近い。「今習っている」と「専門的に学んでいる」を合わせると21.6%になり、現在、何か楽器を習っている人が2割を超えていることになる。また、子供のころに習った人は33%だが、習った年数は5年以下が30人、6年以上が26人と短期間と長期間とばらついた。

表2 楽器実演歴

質問項目	%
全く習っていない	45.5
子供の時習った	33.0
今習っている	15.9
専門的に習っている	5.7

③音楽的環境度

表3に身近な人が楽器演奏をしているかを尋ねた結果を示す。知り合いや家族が楽器演奏をすると答えた人が86.4%と8割を超えている。家族がしていると答えた人が40.3%で4割である。反対に最も少なかったのは、子供時代、両親が演奏していたで、2.1%に留まり、音楽環

境が良くなったのは、大人になってからの人が多いことが推測される。全くいないのは11.5%と1割程度と少なく、今回の参集者には常連が多く、環境のよさと鑑賞頻度の高さが比例しているのではないかと推測される。

表3 音楽環境の度合い

質問項目	%
全くいない	11.5
子供時代、両親が演奏していた	2.1
家族	40.3
知り合い	46.1

4. クラシックコンサートの雰囲気

①結果の概要

クラシックコンサートの雰囲気をどのように感じるかで、コンサートに対するその人の意識や構えが読み取れるのではないかと考える。表4に示す8項目を設定した。

表4 コンサートの雰囲気

質問項目	%
退屈	1.0
堅苦しい	5.3
閉鎖的	1.4
敷居が高い	5.8
教養の場	13.5
心地良い	58.7
楽しい	14.4
その他 (自由記述)	0.0

この中で、最も多かったのは「心地良い」で58.7%と圧倒的に多い。2番目は「楽しい」で14.4%。3番目に「教養の場」が13.5%であった。この3つは好感の持てる雰囲気の方に当てはまるプラスイメージであろう。この上位3つを合わせると86.6%になり、クラシックコンサートの雰囲気に対して、プラスイメージを持っている人が8割を超えていることが示された。

②音楽経験度との関連性

音楽経験度によって、クラシックコンサートに対するイメージが異なるのではないかと。まず常連と一見では、雰囲気の受け止め方に差異は見られるだろうか。

表5 雰囲気を感じ方と鑑賞頻度の比較 (単位:人)

	年に 0回	1回	2回	3回	4回	5回	6回 以上	11回 以上	21回 以上
退屈	1	0	0	1	0	0	0	0	0
堅苦しい	0	5	2	2	1	0	1	0	0
閉鎖的	0	1	0	0	1	0	0	1	0
敷居が高い	3	6	2	1	0	0	0	0	0
教養の場	4	13	2	2	2	1	1	3	0
心地良い	27	37	17	14	5	9	8	4	1
楽しい	6	7	5	5	1	1	3	2	0
その他 (自由記述)	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表6 雰囲気を感じ方と鑑賞期間の比較 (単位:人)

	0年	1年	2年	3年	4年	5年	6年 以上	11年 以上	21年 以上	31年 以上
退屈	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
堅苦しい	2	0	0	0	0	1	0	4	0	4
閉鎖的	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
敷居が高い	3	0	2	0	0	0	1	1	2	3
教養の場	3	1	1	4	0	2	8	4	3	2
心地良い	26	3	6	2	1	10	19	18	16	21
楽しい	5	1	0	3	0	3	5	5	3	5
その他 (自由記述)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表5に、雰囲気を感じ方とコンサート鑑賞頻度の比較表を示し、表6に雰囲気を感じ方とコンサート鑑賞期間の比較表を示す。鑑賞頻度の高低と雰囲気を感じ方には、若干だが差異が見られる。コンサートに対するイメージは、参加頻度によって階層化している事が分かった。鑑賞期間との比較を見てみると、11年以上前から来ている長期間の層に、マイナスイメージを選択した人が多い。

この2つの比較結果から見えてくる事は、相当以前に通い始めたものの鑑賞頻度が低い人に、マイナスイメージを持っている傾向がある。推測ではあるが、昔行って見たが、あまり良いイメージを持ってなかった、あるいは満足できなかったため、コンサートへ行く頻度が少ないままになっている層と言えるのではないか。言い換えれば、以前行ったコンサートがその人にとって合ったものであればそうはならなかったと言える。

さらに、実演経験度との関連性についても調べた結果、経験度に応じて好感度が増すことがわかった。

これらの結果から、日常的に音楽を身近に接している人ほど、コンサートに対して良いイメージを持ち、又、悪いイメージを持ってしま

うと、鑑賞頻度が下がったりする傾向を認めた。

5. コンサートの内容に関する満足度

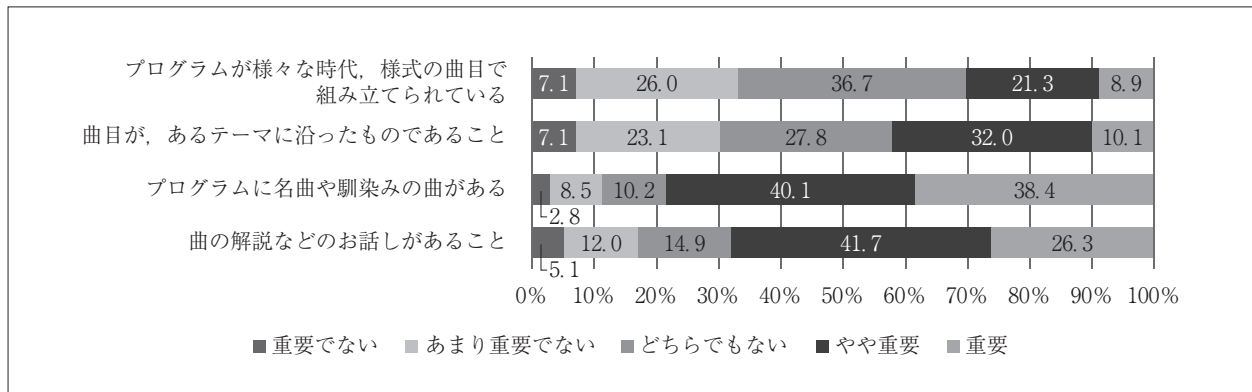
様々な時代の作品や、異なった様式の曲目を組み合わせたプログラム、名曲を連ねたプログラムのコンサートは以前からあるが、最近増えてきているスタイルのものが、テーマやサブタイトルを設定し、それに関連した作品で統一されたプログラムを演奏するコンサート、さらには、演奏だけでなく、曲の解説などのお話を加えたトークコンサートやレクチャーコンサートもこの頃盛んである。実際どの内容のものが満足度を高めるのかを問うてみた。また、どのような層が、どのタイプのコンサート内容を好むのかを調査した。

以下の4つのプログラム・パターンを提示し、それぞれ重要か、重要でないかを尋ねた。

- ①プログラムが様々な時代、様式の曲目で組み立てられている。
- ②曲目が、あるテーマに沿ったものであること。
- ③プログラムに名曲や馴染みの曲がある。
- ④曲の解説などのお話があること。

以上の4問全ての設問は、リッカートスケールの5段階尺度で行った。結果を図3に示した。

図3 コンサートの内容に対する重要度



①の『プログラムが様々な時代、様式の曲目で組み立てられている』に関しては、「どちらでもない」を選択した人が一番多く36.7%であった。また、「重要でない」と「あまり重要でない」をまとめると33.1%と3割強の人たちが重要視していない。「重要」と「やや重要」をまとめると30.2%で、重要視していない方がわずかに上回ったが、「重要でない」「重要」「どちらでもない」がほぼ均等にばらついていることが見られる。

②の『曲目が、あるテーマに沿ったものであること』に関しては、「重要」「やや重要」の重視している層は42.1%で、「重要でない」「あまり重要でない」の重要視していない層は30.2%となった。重要視している人の方が12%ほど多かった。

③の『プログラムに名曲や馴染みの曲がある』に関しては、最も高かった値は「やや重要」で40.1%、次いで「重要」が38.4%であった。「重要」と「やや重要」を合わせると78.5%と8割弱の人がこのプログラム内容を重要だと考えていることが分かる。

④の『曲の解説などのお話があること』に関しては、「やや重要」が41.7%と一番多く、次いで「重要」が26.3%。この設問も「重要」と「やや重要」を合わせると68.0%と高い値で、7割弱の人たちが重要だと考えていることが分かった。

また、音楽経験度とコンサート内容に対する満足度の比較を行ってみた結果、①の『プログラムが様々な時代、様式の曲目で組み立てられている』に関しては、実演経験で専門的に習っている層のみが重要視しており、②の『曲目が、あるテーマに沿ったものであること』に関しては意見が分かれた。③の『プログラムに名曲や馴染みの曲がある』に関しては、全ての層にお

いて重要視する意見に大きな偏りがあった。④の『曲の解説などのお話があること』に関しては、実演経験で専門的に習っている層のみ、重要視しない傾向が認められた。

6. 考察

(1) 聴衆の期待するコンサートをいかに創るか
聴衆の期待するコンサートは、人それぞれ異なっている。そのコンサートに満足するかどうかは、聴衆にとって、その演奏会が自分の期待に合うものかどうかで判断される。19世紀にヨーロッパで定着したクラシックコンサートの形式を、現代に至るまで推奨され続けているが、全ての層にそう簡単に受け入れられるとは考えにくい。また全員が、その固定されたコンサートを聴かなければいけないと定める事は、何らかの不具合を起こすだろう。

それぞれの人が持っている音楽的経歴が異なるため、求めるコンサートは自然と異なってくると思われる。クラシック音楽の本場であるヨーロッパのように、長い歴史の上で築いてきたクラシック音楽の文化が根付いている場所とは状態が違うのは当然である。「満足した！」と感じる経験をした人は、コンサートを好きになるが、満足度を十分に感じられなかったり、「つまらない」などと思うようなコンサートを体験した人は、コンサートに対して嫌悪感を持ってしまう。つまり、満足感を与えるコンサートの経験を積む事で、その人の満足度は変わっていくと考えられる。

そのためには、その時点での、その人の参加目的に合った内容のコンサートを選択し、そこで体験した事を上手く汲み取って、自分の音楽的知識を育てていき、次第に聴く力を向上させていく事の方が、芸術音楽を聴くためには、結

果的に大事なのではないだろうか。始めは、音楽に聴くことのできるコンサートを体験し、経験していく事で、その人の持つ聴く力は変わっていき、より高度な満足度となっていくと考えられる。そうなれば、芸術文化として、クラシックコンサートが幅広く社会に定着していく事につながると考えられる。

(2) コンサートの種類の分りにくさの解消

前項で示したように、聴衆が持っているコンサートへの参加目的を果たすためには、コンサートの内容がその目的を満たすものであれば満足する。そのため、内容設定の際に、どの参加目的の聴衆向けであるのかを明確に設定することが大事である。聴衆の期待しているコンサートと、実際のコンサートでの体験内容とのギャップを減少させるには、聴衆自身が求めているコンサートを見つける事も大事で、自分に合ったコンサートに出会う事で、満足度を上げることになる。

どのタイプの演奏会でも、「コンサート」と銘打っている現状は、その内容が伝わりにくいのではないだろうか。中には、レクチャーコンサート、トークコンサート、名曲コンサート等と、コンサートの種類を名称として示しているものもあるが、その区別はまだあいまいなものではないだろうか。「この行動をすると、良くなるのか、悪くなるのか」と自問する場合、悪い予測が良い予測を凌駕する。その上、直感的な決定を左右するのは、状況に関する様々な特性が分りやすいかどうかだ。分りやすい特性が決定に影響し、分りにくいものは軽視される⁴⁾。そのようなコンサートの種類と聴衆の期待にズレが生じるような現状を改善するために、これまでのコンサートの公表の仕方をより細かく内容がはっきりと分るような方法に変えていくことも重要でないかと考える。

7. まとめ

今回の日本での調査結果から明らかになった点は、60代以上の高年齢層が多く、定期的にコンサートに通っている人がほとんどで、いわゆる常連が多かった。また雰囲気に関しては、良いイメージを持っている人が多くを占め、さらに内容に関しては、名曲を聴く事に対して満足を感じる人が非常に多く、次いでトーク付きのコンサートを重視する人が2番目に多く、高い

満足度を得られるようだ。

しかし、常連が多くを占める日本でのコンサートでは、聴き易いタイプのコンサートを期待している聴衆が多く見られた。この原因は日本で表面的にクラシック音楽が広まった事⁵⁾と、考察で述べたように、コンサートの経験をする際に、その人の音楽的知識を積みながら体験していないと言えるだろう。それは、コンサートというものの自体の分りにくさから、その時のその人が選ぶべきコンサートを選択しきれていないことから来る結果であろうと思われる。

日本で西洋文化であるクラシック音楽を文化として根付かせるには、従来の定型化されたコンサートだけに頼らず、様々な試みを続けていくことで、音楽が日常的に生活の中に溶け込み文化として社会的な地位を持つことにつながるのではないと思われる。そのためには、そのコンサートで一体どのような体験ができるのか、一体どういう人たちをターゲットにしているのかを明確に示す事が大事で、その多彩な種類の中から、今の自分が持っている聴取能力から満足できるであろうコンサートを聴衆自身が選択できるようにする。その継続と発展がクラシック音楽を芸術文化として理解することに繋がっていくのではないだろうか。芸術文化とは、交互に作用し合って発展するものだと思う。今後も、聴衆と演奏家が相互に良い関係を持っていくことを推進できる方法を模索する研究を行って行きたい。

参考文献

- 1) 好満あき子「イタリアにおけるクラシックコンサートに参集した聴衆の満足度水準に関する研究」広島文化学園大学学芸学部紀要2, 2011, pp.56-59.
- 2) 二宮洋「レクチャー・コンサート・シリーズに込めた意図と文化的背景」文明 東海大学文明研究所編13, 2008, p.112.
- 3) 加藤毅・矢野眞和・岡村駿「芸術文化活動の参加メカニズムと文化政策」文化経済学会論文集1, 1995, p.36.
- 4) ジョアン・シェフ・バースタイン／山本章子訳『芸術の売り方』英治出版, 2007, p.71.
- 5) 二宮洋「レクチャー・コンサート・シリーズに込めた意図と文化的背景」文明 東海大学文明研究所編13, 2008, pp.108-109.